

イラワジデルタのほとりで

鶴田幸一



上掲は「キャリア、この一枚」と言うべき、私の三十数年の仕事人生一番の写真です。2011年12月19日の午後6時ごろ、ベースキャンプに戻る舟の上から撮りました。

当時の日記によると、数日前から体調を崩し、朝は3回もトイレに駆け込んでいます。午前9時にソネラティアの聖木にお参りしました。2008年5月のサイクロン・ナルギスで主幹を折りながらも生き永らえた古色蒼然たる神さびた大木です。ヨカゾウと言う名の木の精霊が棲むと信じられています。菩提樹の仲間の着生植物に覆われ、何十年後かには完全に取って代わられるのでしょうか。無為自然。

相棒のチャーニエン君が、ミャンマー人は9の数字を好むのだと教えてくれました。時間で言えば、9時45分が最高。9+4+5=18、さらに1+8=9となるのですべてよし、というわけです。朝の光を浴びてゆっくり過ごした後、昼寝をし、夕方から現場に出てチャーティン村の僧院植林の打合せをしました。日が暮れ、穏やかで優しく美しい酔夢のような光景に出逢えたのも、聖木とヨカゾウのご加護だったのかも。

夜は、ビールを飲みながら馬鹿話で盛り上がり、チャーチャーさんと珍妙なやりとりをしています。その年は東日本大震災の年で、秋にチャーチャーさんらスタッフ4人を日本に招待しました。迷子になった時の合言葉「横浜駅西口」を教えたのですが、帰国してからもずっと覚えていて、「ヨコハマエキニシグチ、ヨコハマエキニシグチ」とぶつぶつぶやくチャーチャーさん。まことに愛嬌のある面白い男です。シンプルに満ち足りた一日。

ミャンマーの人と自然のおおらかさに守られ、私たちは幸せな旅人であり続けました。しかし、時には羽目を外して、罰が当たることも。ある日のこと、ひと仕事終え、エンジンボートで帰路につきました。安堵感からか、ボートの上で飲めや歌えのドンチャン騒ぎをしていたら、私のコップの中に何やらヌルヌルした虫が飛んで入ってきました。虫は口の中に入れてすぐに吐き出しましたが、ビールは勿体ないのでそのまま飲み干しました。その夜から数日間、発疹と高熱に侵され、朦朧と床に伏しました。まるで赤鬼のように、幽明境をさまよいました。生還できたのは運が良かったの一言に尽きます。

今、世界は新型コロナウイルスのパンデミック渦中にあります。そして、ミャンマーは権力の亡者と化した亡国の徒のため、塗炭の苦しみを強いられている。まさに人災です。歲月人を待たず。謙虚な心で、ミャンマーに「夕照の平穏」が戻ることを祈っています。